

## Ep. 11

### 博物館の新たな 社会貢献法

# 「一次情報」の威力とは

インターネットの魅力は、いつ、どこにいても情報を引き出せること。しかし、あまりに情報が増えすぎて、どれを信じれば良いのか分からない。そんな時に頼りになるのが、「専門家が太鼓判を捺した一次情報」の存在です。

インターネット利用者が博物館の Web サイトに期待すること。それは、現実の博物館に人々が来館する理由を考えれば一目瞭然です。館が所蔵している作品とその情報を、学芸活動の成果とともに広く公開すること。これ以外にありません。

「Web サイトを活用した情報発信」と言えば簡単ですが、実際に着手すると、やはり大変です。博物館の現場では、意欲はあるものの、その作業量を見ると負担は大きく、現実的には対応し切れないというケースが圧倒的です。博物館の存在意義にも直結する話であるだけに、何か良い方法はないか…私は、常々そう考えてきました。

## 日常業務さえ知的資産づくりの博物館

ある日、お邪魔した館の学芸員さんとの雑談の中で、展示物の添付資料づくりについてのご苦労についてお聞きする機会がありました。「わずか3~4行ほどの展示キャプションの文章を考えるのに、丸2日かかることもある」というエピソードを伺って、私は「これこそ私たち一般市民が学芸員に期待することそのものだ」と感心しました。

博物館は、公的な専門機関として、発信する情報内容の正当性に責任を負っています。だからこそ、人々は館および学芸員という存在に大きな魅力を感じ、それを自分の知識へと吸収したいと思うのです。私たちが博物館を評価するのは、そこに正確性が担保された「一次情報」があるからこそなのです。

よって、博物館は、膨大な情報から「信頼に足るものを探す」というインターネットの特性と本質的に相性が良いと言えます。専門家が調べた貴重な資料が保管されているのですから、ネット利用者の視点で見ても魅力。当然、もっと広く活用されるべきであり、環境が整って認知が高まれば利用者も集まることでしょう。実は、不正確な資料が氾濫することこそが、イ

ンターネットの弱点とも言えるのですから。

## 「一次情報の公開」こそ、博物館の新しい社会貢献法

何かを調べなければならぬ立場にいる人は、私たちの想像以上に多いものです。学識者から記者、学生に至るまで、何かを執筆する人は、例外なく何らかの文献・資料を参照します。自分ですべての事象を記憶しない限り、直接的に、間接的に、必ず何らかの「情報源」を当たることになるのです。

博物館は、まさにその情報源に該当するのですが、館自身がそれを自覚していないように思います。苦労して作成したキャプションの文章を、その展覧会限りで終わらせるなんてモッタイナイ。どこか公共の場で公開しておけば、将来の作業の材料になるだけでなく、他人が「公的な機関の資料」として活用できるかもしれないのに…と思わずにはいられません。

他館の学芸員をはじめとする専門の研究者のみならず、教師が先生が副教材を手製する時、観光サイトやミニコミ誌のライターが地域の歴史文化情報を書く時、自治体職員が企業誘致や観光振興で文書を作成する時、個人がブログを書く時、などなど。学芸員が日常的に作っている資料は、さまざまな局面で求められる「正確な情報源」となり得るのです。



玉石混交でデータが氾濫するインターネット社会では、「一次情報」は極めて貴重です。それを積極的に提供する機関として位置づければ、博物館という文化施設にとって、新しい社会貢献法となるはず。同時に、業界を横断する省力化へのソリューションともなり得るのではないのでしょうか。

博物館の業務には、特別な価値がある。ネット時代だからこそ、改めて認識したい「事実」だと思います。